

## シェルドンと神

今までに、かなりの数のロータリアンの文献を翻訳しましたが、ほとんどの人は神について触れており、私生活を含めたあらゆる場面で神の加護を願ったり、神の意志に従ったり、神を祝福する文章が出てまいります。

ポール・ハリス然り、チェス・ベリー然り、ウイル・メーニヤ Jr 然り、更に歴代のアメリカ大統領然りです。

これに比べてシェルドンのスピーチの中からは、ほとんど、神という言葉は見当たりません。1910年、1911年のスピーチ中からは、「神」は一切見当たりませんが、1918年のスピーチの中で「もし科学を超えたものならば、それを自然の法則と呼んでください。もし宗教ならば、神の摂理と呼んで、判りやすく述べる方が良いでしょう。」と、用語として「神」が出てまいります。

1921年の The Rotarian の原稿とエジンバラのスピーチでは、「世界の様々な宗教によって、ほとんど普遍的に述べられている、神である全知 Omniscience、全能 Omnipotence、普遍的存在 Omnipresence の三位一体を示すものです。」という表現と「もしもあなたが神ということばを好まないのなら。創造主・provider という言葉を使ってください。という記述で「God」という単語が出てきます。

シェルドン・スクールの膨大な教科書も、コンピューターの検索機能を使って、くまなく検索しましたが、「God」という単語は見つかりませんでした。徹底的に神を排除して、純粋な経営学上の理論でサービス理念を解いているのです。

初期のロータリーは WASP (White Anglo-Saxson Protestant を中心に作られましたから、大部分は敬虔なキリスト教徒で構成されていたと思われまます。

更にイギリスのロータリー群は、アメリカの運動とは別に独自に作られ、独自の自治権を持ったまま、後日、RI に合流したという経緯があります。当時のイギリスでは職業は世襲が原則であり、高度の倫理性を持った天職という職業観でしたから、シェルドンの経営学に基づいた学問的な職業観とは全く相容れず、終始 He profits most who serves best の廃止を要求し続けた経緯があります。

シェルドンの思考はまさに修正資本主義を先行したものであり、シェルドンが輝いた 1913 年から 1921 年は、後日修正資本主義を採用する民主党政権（ウッドロウ・ウイルソン大統領）でしたから、思い切り活動できる環境にあったと思われまます。

さて、1921年政権交代で大統領が共和党のウオーレン・ハーディングに代わりまました。ロータリアンの大部分は、伝統的に共和党の応援者であり、民主党的なシェルドンの経営学理念に同調するロータリアンは激減したものとわれまます。そんな中で、職業を天職だと信じ、シェルドンの経営学理念を真っ向から否定するイギリスでスピーチをすることになったのです。

シェルドンを失脚させようという、社会奉仕派の陰謀だったのかもしれませんが、シェルドンはスピーチを断るべきだったかも知れまません。

私の考えでは、シェルドンはこの際、思いのたけを語って、これを最後にロータリー運動から決別する覚悟だったと思いまます。

案の定、45分の予定を1時間以上に延長して、彼の理論のすべてを語り尽くしました。場所がイギリスなので、「神」という言葉も少し入れまました。

最後に、「結論」を述べて、それで終わりだと思ったら、さらに、「ナイアガラ」という皮肉たっぷりなおまけをつけています。その内容は、「人間の意識の中で、物理的な分野において最強のナイアガラよ

り強い「光」と「力」を持った、最も優れた発電機にならなければなりません。全世界のロータリークラブに対して、法則に関するささやかな教訓と人生との関連に関する内容の、私の好きな無韻文の作品を捧げる名誉を与えてください。」

これは、ナイアガラを現在のロータリーに例えて、その力よりも、彼が主張する奉仕理念の方が正しいことを示唆する文章です。

そして、この文中で、今までも、これからも使わない、「神」という単語を12回も乱発しているのです。これだけ「神」を使ったら、「神」が大好きなイギリス人も満足したでしょう・・・私は、シェルドンの精いっぱいのお肉だと、受け止めています。そして、これを最後にロータリーとは手を切って、その後1930年までは、籍だけはおいていますが、ロータリーとの関りはありません。1921年以降は、RIの文献にも、シカゴクラブの文献にも、シェルドンの名前は一切出てきません。

日頃とは異なる God の連発のスピーチに対して、イギリスのデビッド・ニコルはその真意を悟ってか、Golden Wheelの中で、わざと「セールスマンの死」というタイトルをもうけて、シェルドンを強く非難しています。更に、「セールスマンは二度死ぬ」というサブ・タイトルを儲けて、「シェルドンというセールスマンは1935年に死んだが、この大会で既にこの世を去っている。」と書いています。なお、このスピーチに際して送られた盛大な拍手は、感銘を受けたからではなく、長い演説がやっと終わったという安どの拍手であったとも書かれています。

この逆襲以外には、シェルドンは経営学上の奉仕理念を説くにあたって「神」という言葉を使わなかったというのが、私の解釈です。

なお私的な著作として、1929年に書かれた、「奉仕の原則と保全の法則」の中では「私は現生でどれくらい上手に義務を果たしてでしょうか。創造主、神、すべてをもたらす宇宙の源流、私の仲間たちへの義務です。上手にそれを果たしたでしょうか。そうだとすれば、私は地獄に落ちる心配をする必要はないと思います。私はこの世とあの世の双方における、地獄と天国を信じます。私たちは天国を作りますし、地獄も作ります。それらはすべての人間に共通な精神と心の状態に過ぎません。」と死後の世界のことを書かれています。

善行を積めば死後は極楽へ、悪行を重ねれば地獄に堕ちるとするのは、仏教の思想です。シェルドンも自らインドのバカバンドスの影響を受けたと述べていますから、東洋的思考を強く受けていたのかも知れません。

この年に30歳という若さでこの世を去った息子を悼む心からか、彼自身の体調についてかなり不安があったからか、何れの理由かは分かりませんが、厭世感の漂う文章であることには間違いありません。

この本を執筆した翌年、彼はロータリーを去り、その5年後、67歳の若さでこの世を去っています。